

# 鹿児島市の児童発達支援・放課後等デイサービス施設における 災害への備えに関する研究

鹿児島大学 医学部保健学科 地域包括看護学講座 日隈 利香  
鹿児島大学 医学部保健学科 地域包括看護学講座 稲留 直子

## はじめに

近年増加傾向にある神経発達症（神経発達障害）を持つ児童は、見た目では障害があるように見えない事も多く、周囲の理解と支援を必要としている。また、これらの児童は日常生活の変化が苦手な場合が多く、適切な支援が必要不可欠であるため、かねてより災害に対する事前の備えが必要である。

2019年10月1日時点で、鹿児島市には170カ所の児童発達支援・放課後デイサービス施設があるが、これらの施設における災害への備えに関する調査報告書は見当たらなかった。そこで今回、鹿児島市の児童発達支援・放課後デイサービス施設における、災害への備えの現状を明らかにすることを目的に研究調査を実施した。

## 研究方法

研究対象者：2019年10月1日現在、鹿児島市が把握する「鹿児島市の児童発達支援・放課後等デイサービス」を実施する施設170カ所の管理者

調査期間：2019年11月1日～2019年12月31日

調査方法：自記式郵送調査

郵送調査の回答率を上げるため本調査を実施する前に、鹿児島市健康福祉局福祉部障害福祉課ゆうあい係の担当者に本研究の趣旨を説明し研究協力を御願いし、市担当者より鹿児島市170カ所の児童発達支援・放課後等デイサービス施設にメールにてアンケート実施の周知を図っていただき、その後郵送調査を実施した。

質問用紙：過去に発達障害情報・支援センターにより実施された調査報告書等を参考に作成したオリジナルのアンケート用紙を用いた。

質問項目：①児童発達支援・放課後等デイサービス施設の施設概要

②災害時の飲料水や非常食の常備の有無、懐中電灯や携帯ラジオ、簡易トイレなどの災害時備品の常備の有無、各児童に対する個別サポートブックの作成状況、心理専門スタッフの有無、地域の危機管理課などの緊急連絡先作成の有無など、各施設における災害を想定した具体的な備えについて

分析方法：Excelを用いてデータをまとめ、統計ソフトSPSS 26.0J for Windowsを用いた

倫理的配慮：研究対象者の人権擁護を厳守するために、得られたデータは個人が特定されないように、質問用紙、返信用封筒共に無記名にて回答していただくなど、十分に配慮して研究をすすめた。

調査対象者に対して文書にて本研究の目的・方法についての趣旨を説明し、調査紙の返信をもって研究協力者の承諾を得たものとした。

## 用語の定義

神経発達症とは、多くの障害を発生原因に注目してグループ化したものであり、2013年に米国精神医学会の『DSM-5』に採用された。DSM-5では、知的能力障害群（知的障害）、コミュニケーション症群／コミュニケーション障害群（吃音など）、自閉スペクトラム症／自閉症スペクトラム障害、注意欠如・多動症／注意欠如・多動性障害、限局性学習症／限局性学習障害、運動症群／運動障害群（発達性協調運動障害、チックなど）、他の神経発達症群／他の神経発達障害群、といった障害をまとめて神経発達症と呼んでいる。これらの障害は、神経の発達阻害という共通の原因を持つ連続的な障害という考え方に基づいているため、「神経発達症」はこれまでの「発達障害」よりも広い範囲を指す言葉である。

## 研究成果

研究依頼施設数：鹿児島市の児童発達支援・放課後等デイサービス施設 170 カ所

調査紙票配布数：170 票 研究協力数：89 票 有効票：89 票

調査紙票回収率：52.4% 有効回答率：52.4%

### I. 施設概要

施設概要は、児童発達支援施設 16 カ所（18.0%）、放課後等デイサービス 34 カ所（38.2%）、児童発達支援施設・放課後等デイサービスの両方 39 カ所（43.8%）であった。

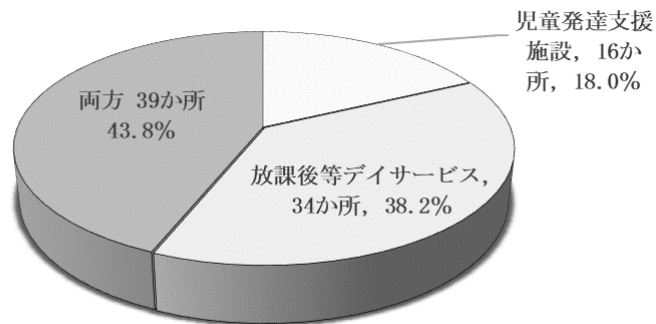


図1 支援の種類（N=89）

### II. 災害を想定した具体的な備え

#### 1. 災害に備えて飲料水や非常食を常備しているか

全体の 51.7%の施設が、災害に備えて飲料水や非常食を常備していると回答していた。

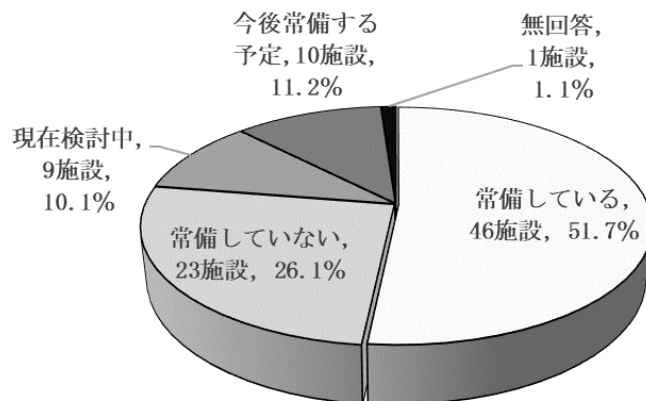


図2 災害に備えた飲料水や非常食の常備率（N=89）

#### 2. 災害に備えて懐中電灯や携帯ラジオ、簡易トイレや毛布、救急医薬品など災害時の備品を常備しているか

全体の 59.6%の施設が、災害に備えて懐中電灯や携帯ラジオ、簡易トイレや毛布、救急医薬品など災害時の備品を常備していると回答していた。

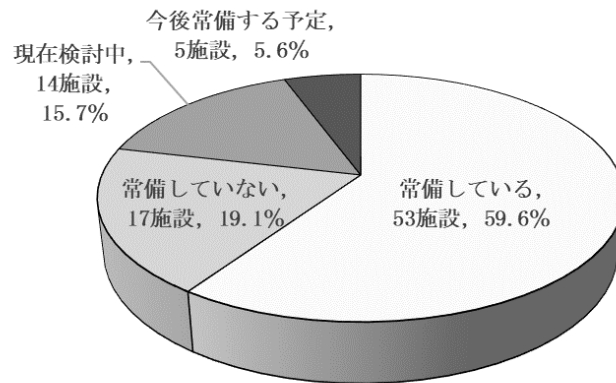


図3 災害時必要な備品の常備率 (N=89)

### 3. 子ども一人一人の特徴を記入した個別サポートブックを作成しているか

災害時に対応できるように、子ども達一人一人に対する配慮点(アレルギーの有無、本人の行動の特徴等)を書き込んだ個別のサポートブックを作成していると回答した施設は全体の 27.0%であった。今後作成予定の 6 施設を合わせると 33.7%という結果であった。

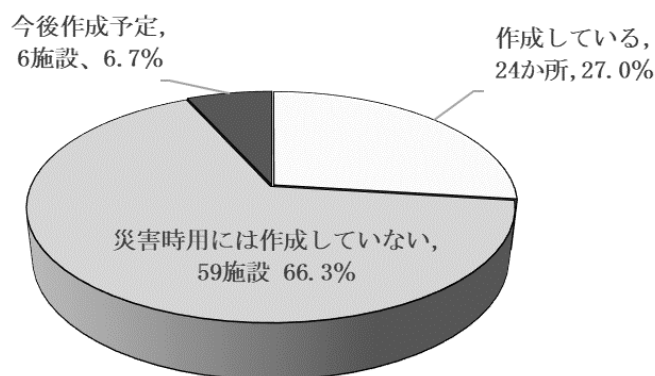
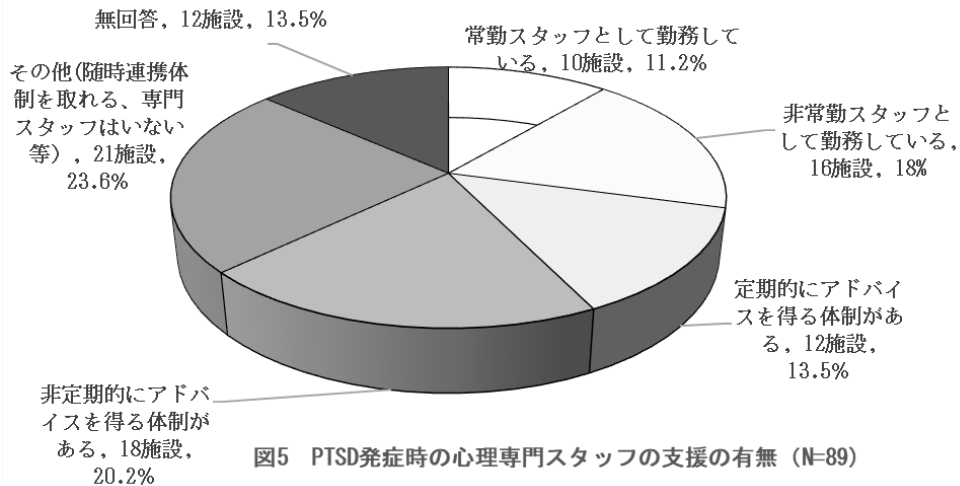


図4 個別サポートブック作成の有無 (N=89)

### 4. 被災による PTSD 発症時に相談できる心理専門のスタッフが施設内にいるか

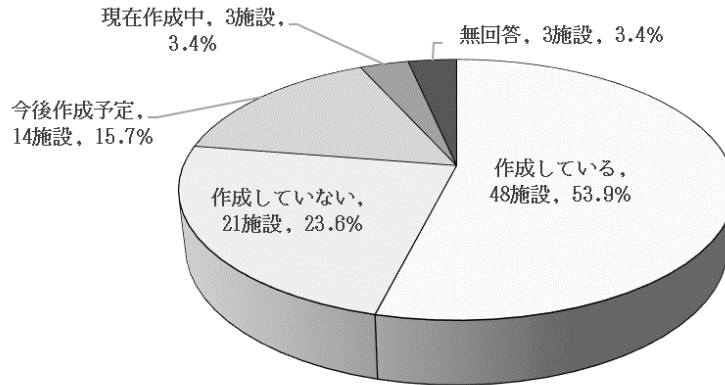
災害を体験した場合、情緒的反応の一つとして「PTSD(外傷性ストレス障害)」を引き起こすことがあり、体験後数か月経って症状が現れることもある。この様な時に相談できる心理専門のスタッフが施設内にいるか質問したところ、77カ所の施設から回答が得られた。心理専門の職員が常勤スタッフとして勤務している施設は全体の 13.0%という結果であった。

しかし、20.8%の施設で心理専門の職員が非常勤スタッフとして勤務し、15.6%の施設で定期的にアドバイスを得る体制を取っているなど、約半数の施設で比較的に心理的アドバイスが得やすい環境にあった。その他、23.4%の施設で非定期的にアドバイスを得る体制があり、9.1%の施設で随時連携がとれる体制を整えているなど、非定期ではあるものの何らかのアドバイスを得ることが出来る体制を作っていた。現時点で PTSD 発症時に相談できる心理専門の職員がいないと回答したのは 6 施設 (7.8%) であった。



### 5. 管轄の災害救助業務を行っている地域福祉課や防災に関する業務を行っている危機管理課などの緊急連絡先を作成しているか

全体の半数以上の53.9%の施設が「緊急連絡先を作成している」と回答し、現時点では作成はしていないものの、今後作成予定の施設15.7%、現在作成中の施設3.4%と、全体の73%の施設で緊急連絡先を準備している事が明らかになった。



### 6. 災害への備えとして必要だと思うこと

児童発達支援・放課後デイサービス施設の管理者に、災害への備えとして必要と思うことについて記述してもらったところ、約20名から回答を得ることが出来た。

災害の備えに対して必要なこととして、「システムの整備」、「訓練や研修が必要」、「備えが必要」、「連携が必要」、「保護者との連絡方法等の確認」を上げていた(表1)。

表1 災害の備えに対して必要だと考えること

システム の整備	<ul style="list-style-type: none"> <li>・障害のある子どもたちが落ち着いて避難生活を送ることができるシステム</li> <li>・聴覚障害のみならずコミュニケーションに障害をかかえている人専門の障害センターが要る</li> </ul>
訓練や研 修棟が 必要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・回数（訓練の）を積んでいく事</li> <li>・昼間と夜間、室内と外出先、送迎中の車内などに合わせた訓練や研修を定期的に確実にやっていくこと</li> <li>・訓練に対して職員は真剣に取り組むこと</li> <li>・日頃の訓練など。遊びの中で災害が起きた時は？など話をする</li> <li>・昼間と夜間、室内と外出先、送迎中の車内などに合わせた訓練や研修を定期的に確実にやっていくこと</li> <li>・発災から施設の再開までの詳細なシミュレーション</li> </ul>
備えが 必要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・送迎時に災害に合った際、車両に必要な飲料水や非常食の常備について</li> <li>・緊急時対応食材・水・毛布等</li> <li>・マニュアルとしては、あっても、それが実際起こった時にいかすことができるような備えが必要</li> <li>・おさんぽに行っている際の避難場所等を今後検討していきたい</li> <li>・一人一人の災害時対応の認識を高めていくこと</li> <li>・想定外の想定外の難しさ。弱者のケア。</li> <li>・地域として降雨災害は直接的ではないが、交通事情の混乱衣夜職員の移動手段。・桜島の想定外の大噴火による災害予想</li> <li>・保育園に併設している施設なので「大規模災害防災マニュアル」は整えている。これで万全ということは無いので、気が付いた事は取り入れていきたい</li> <li>・避難危険度の認識</li> </ul>
連携が 必要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の中にあるデイ事業所なので地域の方との連携が必要だと感じます</li> <li>・水害時等、災害時〔究明ボードでの呼びかけは聴覚障害者には聞こえない。町内放送等音声〕インフラの崩壊がおこった時の情報獲得に限界がある。近隣との共同での情報交換が必須と感じる。</li> </ul>
保護者との 連絡方 法等の 確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>・5月に教室が出来たばかりで検討中の項目が多くなっています。保護者との確認が先決だと思います。</li> <li>・家族との連絡方法をしっかり取り決めておく必要があると感じた。</li> <li>・学童の活動をしている際の電話等が使えない時の保護者への連絡方法や引き渡しの方法等も検討していきたい。</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・千葉や長野の事例では移動中（避難中）に死亡する人もいた。避難所も被災した所もあって判断の難しさを感じる。災害に対しては臨時休業を基本にしているが気象状況によってはサービス利用もリスクとなり得ることにも目を向ける必要があるように思えます。</li> <li>・避難所の整備、障害児・生徒が利用できるか心配      ・パニック、規制など市や県の職員は、地域の方々はどう対応してくれるだろうか？</li> </ul>

## 考察

今回、鹿児島市の児童発達支援・放課後デイサービス施設 170 か所における災害への備えに関する調査を実施したが、災害に備えて飲料水や非常食の準備状況については、常備している施設と今後常備予定の施設と合わせても約6割に留まっていた。

懐中電灯や携帯ラジオ、簡易トイレや毛布、救急医薬品などの災害時の備品に関しても、常備している施設と今後常備する予定の施設と合わせても約6割に留まっていた。

災害時に適切な対応が出来るように子供一人一人の特徴を記入した『個別サポートブック』の作成状況については、作成している施設は今後作成予定の施設と合わせても約3割に留まっていた。災害直後の混乱時には社会全体が混乱することは想像に難しくなく、社会的弱者である子どもが被害者となる可能性が高い。特に神経発達症を持つ児童はパニック等の症状を引き起こすこと

も考えられるため、本人の行動の特徴やアレルギーの有無など記した個別サポートブックは、適切な支援の為にも必要不可欠であると考えます。

施設における管轄の災害救助業務を行っている地域福祉課や防災に関する業務を行っている危機管理課などの緊急連絡先の作成状況については、約 7 割の施設が、作成済・現在作成中・今後作成予定と回答しており、準備が進んでいることが明らかになった。

その他、災害を体験した場合、体験後数か月経って PTSD の症状が現れることがある。被災した子どもたちだけではなく子どもたちを支援する施設職員に対しても継続した心理的ケアが求められる。しかしながら、心理専門のスタッフが勤務している施設は常勤・非常勤と合わせて約 3 割弱という結果であった。その他、約 3 割の施設で定期的または非定期的アドバイスを得る体制を確保しているものの、問題発生時に迅速かつ適切に支援を受けるためには、現体制では不十分ではないかと推測する。

児童発達支援・放課後デイサービス施設の管理者 20 名が考える『災害の備えに対して必要なこと』として、「システムの整備」、「訓練や研修が必要」、「備えが必要」、「連携が必要」、「保護者との連絡方法等の確認」が上がっていたが、今回の調査結果で見えたこととして、災害に対する取り組みは各施設で差があり、対策が十分といえない施設もあった。

災害を防ぐことはほぼ不可能であるが、災害への事前の準備や整備によりある程度の減災は可能であるため、神経発達症の子どもたちの被害を最小限に止め適切な支援を実施するためにも、早急に食料品や備品、個別サポートブック等の整備、PTSD 発症時の心理専門スタッフの支援体制の充実が必要不可欠である。しかしながら、災害に対する対策は各施設の責任者の考えによることも大きく、各施設の予算等にも関係してくることから、画一的な整備の充実は難しいと推測する。今後不足している部分を各施設其々で対応するには限界があるため、先ずは鹿児島市全体で児童発達支援・放課後デイサービス施設における災害対策に関する基準を作り、災害対策の予算化、防災・減災についての啓もう活動を行うなど、組織としての取り組みと支援の拡充が望まれる。

## 謝辞

本研究を実施するにあたり、研究に御協力下さいました、鹿児島市の児童発達支援・放課後デイサービス施設の管理者の皆様へ深く感謝いたします。